

表出に制限がある子どもの意思の表出の読みとりと係わり方

亀山 由佳・岡澤 慎一

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日

表出に制限がある子どもの意思の表出の読みとりと係わり方[†]

亀山 由佳*・岡澤 慎一**

栃木県足利特別支援学校*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

本研究では、表出に制限がある子どもとの係わり合いを通し、係わり手としてどのような視点が大切であるか、教育実践のエピソード記録から省察した。係わり手が子どもにとって分かりやすい状況を作り、子どもの発信を受け止め、その行動を意味あるものとして捉え、その背景にある子どもの気持ちを検討するなど双方向的にやりとりを行うことについて考察した。

キーワード：エピソード記録、係わり方、行動の意味

I はじめに

第一筆者は病弱特別支援学校に勤務して、障害の重い子どもたちと係わりをもってきた。係わりの当初は不快な表情が多かった子どもたちが、笑顔が見られたり筆者に手を伸ばしたりして、喜びや楽しさ、子どもの発信に応えることの大切さを感じてきた。一方で集団学習の流れや友達との係わりを優先してしまい、子どもがこの活動や場所は嫌と首を振り、Noの気持ちを表出しているにもかかわらず、活動を行うことや慣れることなどを優先してしまい、表出を受け止められなかったり、受け身的な状況にしまったりしたことがあった。また、子どもの不適切な行為をやめさせることばかり気にしてしまうこともあった。大学の授業や教育相談に同行して、子どもの発信を受け止め、その行動を意味があるものとして捉え、その背景にある気持ちを検討し続けることが大切であるということに気付いた。そこで、どのようにすれば子どもの気持ちを理解できるのか学ぶために、子どもと係わり合いながら、係わり手と

して、どのような視点が大切であるかを検討していきたい。

II 事例紹介

第一筆者（以下、Kと略記）の指導教員の第二筆者（以下、Aと略記）が長期間にわたり訪問しているSくんの教育相談に同行し、係わり合いをもたせてもらった。以下、子どもの実態を紹介する。

1 Sくん

(1) 実態

特別支援学校の小学部4年、男児。訪問教育対象。脊髄性筋萎縮症で常時人工呼吸器を使用しており経管栄養など濃厚な医療的ケアを必要としている。挨拶や質問に対して眼球を上転したり眉間にしわを寄せたりする。右手の親指にわずかな動きが見られ、係わり合い時は右手にエアバックセンサースイッチ（パシフィックサプライ製、以下、スイッチと略記）を使い、Voice Output Communication Aid（以下、VOCAと略記）から係わり手の音声（「はい」）が流れるようにしている。眼球の動きは言葉掛けに応答しているように思われるが、右手の親指の動きは、どのようなときに見られるか把握できていない。Tobii Eye Tracker（Tobii 製、視線入力装置、以下、トビーと略記）を使用したパソコンでの見本合わせ状況（担任や家族の写真など身近な人の写真、好きなキャラクターのイラストなど）についての課題学習を行っている。また、係わり手の甲の上に子ども

[†] Yuka KAMEYAMA*, Shinichi OKAZAWA**:
Interpretation of expression of children with
limited expression and interaction with them
Keywords: Episode recording, Interaction,
Meaning of behavior

* Ashikaga Special School for Children with
health impairments

** Graduate School of Education, Utsunomiya
University
(連絡先: okazawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

の手を重ね合うハンド・アンダー・ハンド（土谷,2006）による鉄琴の演奏、スイッチを用いて玩具を動かしボールを転がすボウリングなどを行い、やりとりをしながら活動を行っている。月に1～3回、2時間程度、活動をしている。これまで15回（2021年4月～2022年3月）の係わり合いを行った。

（2）係わり合いの基本方針

Sくんが視線を向けているものや、係わり手が準備や片付けなど行っていることを言葉で伝え、分かりやすい状況を作る。また、係わり手や活動中の玩具に視線を向け周囲に興味関心をもっている様子が見られたため、視覚的に分かりやすいもので楽しめる活動を考える。Sくんの表情、眼球の動きなどの表出はすべて意味のあるものと捉え、言葉掛けをして表出を受け止める。

Ⅲ 結果と考察

係わり合いを行うなかで、係わり手として大切にしたい視点に気付いた。視点別にエピソードを交えて、筆者が考えたことをまとめる。なお、日付の後の回数の記載は、Kの係わりの回数を示す。

1 発信の意味を丁寧に読み取ること

（1）エピソード1 右を向きたくない

2021年11月1日（8回目）

Sくんはベッド上で左向きの状態で吸引をしてから、右側を向いて活動に入ることが多い。毎回、右側にパソコンを置いてトビーを行っている。AとKが部屋に入ると、Sくんは左側を向いていた。母親が「Aさん来たから、右を向こうか？」にSくんは眼球を動かさない。Aが挨拶をすると眼球を動かす。Aが「寒くなってきましたね」に対して、Sくんは母親に視線を向ける。Aが「ママに確認したの？寒いよねって」。Aが前回の係わり合いの話をする、眼球を大きく動かす。途中、Sくんは母親に視線を向ける。Aが「トビーをやりますか？」に眉間にしわを寄せるが、「勉強だけでなく、ゲームとか？」に眼球を動かす。Aが「右側向きますか？」にSくんは母親に視線を向ける。「こっち（左向き）でやりたい？」に眉間にしわを寄せる。「上で（パソコンを置いて）やる？」、上に視線を向ける。母親がSくんの右胸を触ると眉間にしわを寄せる。母親が「吸引してから右向く？」に眼球を動かす。母親が「だから（右側を）向きたくなかったんだね。それを言っ

てた？ママが気付かなかったね」に眼球を動かす。Kが「だから、ママを見てたんだね」。吸引した後、Sくんは納得して右側を向いてトビーを行った。

（2）省察

Sくんが何かしらの理由があり右側を向きたくないという表出をしていた。Aは活動のしやすさを優先にして身体の向きを変えることをせず、Sくんの視線や表情の表出を受け止め「No」という想いを大切にしていた。母親が左向きの状態で吸引することによって、右側を向くことに納得してくれた。Sくんの眼球の動きや眉間のしわなどの表出を意味があるものと捉え、表出を話の文脈のなかで解釈していくと、吸引してほしかったことも、右側を向きたくなかった理由の一つではないかと思えた。子どもたちの表情や身体の動きなどの意味を話の流れから考えていくと、こうではないかと思えるようなことがあった。考えたことを子どもたちと確認していくと、子どもたちの想いに近づけることもある。子どもたちは表出に制限はあるが、思っている以上に、知りたい、伝えたいなどという想いがあることに気付かされた。子どもたちがどのように思っているかを絶えず考えていくことが大切だと思う。松田（1997）は「教育的な係わり合いの初期の段階では、子どもの『No』という表出を受け止めて応えることが、相互にYesもあればNoもあるより深いコミュニケーション関係を築く上で欠かせない条件ではなかろうか」と述べている。これまで子どもたちの「No」を丁寧に受け止めてこられなかった。「嫌だ」、「やりたくない」という想いこそ、共感してほしいものではないか。子どもたちが「No」と発する理由を考えながら、表出を受け止めていく必要がある。

2 考える時間を十分に保障すること

（1）エピソード2 初めての活動は慎重になります 2021年10月18日（7回目）

ボウリングはSくんの右手の動きでスイッチが入り、ぬいぐるみ（ポチ）が動き、ボールにあたり、転がってピンが倒れる仕組みで行う（図1）。



図1 ボウリングを行っている様子

Aがボウリングの説明をしているときに眼球を動かし、ボールに視線を向ける。ボウリングを行うため、ボウリングのピンを準備している間、スイッチとポチをコードでつないでおく、右手の親指の動きで度々ポチを動かす。Aがもう一度説明をしている間も眼球を動かす。ボウリングが始まると、右手の動きが見られない。Aの「やるのがこわくなってきた？」の声掛けに眼球を動かす。母親「身構えてるね」と言う。Aが「Sくんの準備ができたらいいですよ」に眼球を動かす。ポチに視線を向ける。Aが「ポチを見ましたね」と言う。この時点ではピンが3本だったのでAが「もっとピンを並べますか？10本に」に眼球を動かす。10本並べた後、右手の親指を1回動かす。「ドキドキしますか？」に眼球を動かす。「手を動かしていませんか？」に眼球を動かす。「準備ができたなら手を動かしますか？」に眼球を動かす。右手の親指を1回動かす。母親「応援してあげようか？」に眼球を動かしたので、みんなで応援するが、右手の動きは見られない。母親が「みんなが違うところ見ていたらやる？」に眼球を動かす。Aが「途端にやらなくなったね」、「この後、トビーをやるかもしれないから準備しておきますね」に眼球と右手の親指を動かす。緊張しないように、みんながSくんを見ないようにする。少し経った後、ポチに視線を向け右手の親指を動かし、スイッチが入り、ボールを動かしてピンを倒した。Aが「もう一回やってみますか？」、「これならできそう？」に眼球を動かす。

(2) 省察

ボウリング時の右手の動きはいつもの係わり時より動かす回数が少なかった。以前、右手の動きが10秒に1回程度見られていたときに、Kが「今日は、

はいが多いですね」と言うと、頻繁に動かしていた右手の動きを一瞬止め、再び手の動きが見られたことがあった。SくんがAの質問に応えたように、意図的に手を動かしていないと考える。Sくんの気持ちの準備ができず押していないのであれば、押すまでの時間を十分に保障したり、押することができるように環境を整えたり、また、押さないという気持ちも受け止めることが大切だと考える。子どもたちは「意図的に手を動かしていない」「やりたいけど少し怖い」「自分で最後までやりたい」など様々な想いがあり、係わり手が「待つから大丈夫だよ」「よく考えていいよ」という姿勢を伝えることも大切だと思う。子どもたちが自分で考える時間を十分に保障して、できたときの喜び、達成感を得られるようにすることが大切である。

3 興味関心があること、子どもの発信から始めること

(1) エピソード3 よく見てるよ

2021年12月16日（9回目）

SくんがAとKや玩具に視線を向けていることが多かったので、視覚的に分かりやすく楽しめるロケット飛ばしを考え、製作した。Sくんが右手を動かすとスイッチが入り、ロケットが発射する仕組みである。点数が書かれた大きな的用意して、点数を競った（図2）。



図2 ロケット飛ばしを行っている様子

Aがロケット発射台をSくんの見えやすい位置に置く。右手の親指を動かし、VOCAから「はい」が3回鳴る。Kが「ロケット見えますか？」と聞くと、VOCAから「はい」が鳴り、発射台に視線を向ける。Aが「（発射台）見ましたね」と言う。母親

が「ロケット発射」と言うと約5秒後に、右手の親指を動かして、スイッチが入り、ロケットを飛ばした。ロケットが的の8点のところについた。飛ばした後も、右手の親指を何度か動かす。Kの順番になり、準備している間、Sくんは発射台に視線を向ける。「K行きますね」にVOCA「はい」が鳴る。Kが「5を狙いますね」にVOCAから「はい」が鳴る。Kが「応援してくれているんだね」と言う。的の2点のところについたので、的についたロケットを指さしながら伝え、VOCA「はい」が鳴る。Sくんの番になり、Aが「Sくん発射台の位置はどうする？」に眼球を細かく動かす。AがSくんの眼球の動きを確認しながら、発射台の位置を決める。母親が「3・2・1」と言うと眼球を上にするが右手は動かさない。Kが「Sくんのペースでいいよ」に視線を向ける。少し経ってから、右手の親指を動かしてロケットを飛ばし、的の4点のところについた。

(2) 省察

発射台の準備中やSくんの側でスイッチを押す人に視線を向ける様子が見られた。また、Sくん以外が行っている間、右手を動かしてVOCA「はい」を何度も鳴らしていた。この日のSくんのVOCAを鳴らす頻度を見ていくと、ロケット飛ばしを行っているときは1分間に平均3.9回右手を動かしているが、トビーを行っているときは1分間に平均0.75回であり、3分以上右手の動きが見られないこともあった。トビーを行っているときは眼球を左右に動かして見ることに集中していることが分かり、ロケット飛ばしのときは右手を動かすことに集中していることが分かった。係わり合い当初は眼球の動きや右手の動きを見て、Sくんが意図的に動かしているか分からなかったが、係わり合いの映像を振り返っていくと意図的な動きであることが分かる。これまでの係わり合いで、Sくんに話しかけているときに一方的な係わりになっていないか心配になることがあった。ロケット飛ばしの活動では、Sくんとやりとりをしながら進めて、活動を共有することができたといえる。

4 交渉しながら係わり合いを行うこと

エピソード4 終わりにしたくない

2021年11月1日(8回目)

トビーの画面上に4人の歌手の写真があり、視線

を向けた歌手の曲を聞くことができ、視線で再生、止める、戻すことができる。Sくんは音楽を聞いていた。A「そろそろおしまいにしましょうか？」にSくんは眼球を動かさない。Aが帰らなくてはならない理由を伝える。Aが時計を取りに行くと、Aに視線を向ける。Aが「11時45分にタイマーが鳴るように設定するので、鳴ったらおしまいにしましょうか？」、話の途中で、眼球を上にするが、「おしまいにしましょうか？」に対しては眼球を上にしなない。Aが「(2分伸ばして) 47分でいいですか？」に眼球を大きく上にする。トビーでSくんの視線で音楽を選び聞く。「(タイマーが) ピピピピ・・・・」Aが「おしまいの音楽です。おしまいにしますね」に眼球を上にして終わりにすることができた。

(2) 省察

松田(1997)は「子どもが学習をはじめとする自分の活動について、選択する・一部実行する・終わりにして次の活動に向かうなどの体験を重ねることは、たんに意思の表出を促進されるというだけでなく、行動の自律性を培うものであり、教育的な係わり合いの場では特に重視されるべきであろう」と述べている。Sくんは2分という時間の長さが分かるかは確かではないが、Aに自分の発信が伝わり、受け止められたということは伝わったと思う。係わり合いを行う上では、決して一方的ではなく、子どもたちの想いを確認してやりとりしながら進めることで、よい関係を築くことができる。子どもたちの自分の想いが受け止められた経験があるからこそ、「No」が言えるのではないだろうか。

Ⅳ 全体考察

1 子どもたちが主体的に活動に取り組めるようにすること

子どもが主体的に活動できるとは、子どもの発信によって決める、変化するなど「子どもたちが・・・する」状況だといえる。「子どもたちが・・・する」状況を作ること、子どもたちの力が発揮でき、発信したいと思えるのではないか。子どもたちが課題学習を行っているときに係わり手が「問題を一緒にやりますか？」と聞くと、眼球を動かさず、「自分一人で最後までやりたい」という表出があった。また、自分の動きで楽しめる活動を準備したとき、自発的な動きが増えたり考えたりする様子が見られ、新たな子どもたちの姿を見ることができた。そして、

子どもが周りの状況をどのように見ているのか理解することにつながった。自分の発信が係わり手に伝わったり、発信により状況を変化させたりできる状況こそ、子どもたちが意欲的に活動に取り組めるための条件の一つであると考ええる。また、自分の力でやり遂げたいという気持ちを大切に、満足感が得られるような活動を準備する必要がある。そのときに活動や教材を準備するだけでなく、子どもたちが分かりやすい状況を作り、子どもの力が十分に発揮できるような環境を整えることも大切である。

2 気持ちを共有すること

係わり手が表出を受け取ったことを子どもに返していくことが大切で、子どもたちに自分の気持ちが伝わった、分かってもらえたという想いをもってほしい。子どもたちが視線を向けているもの、気になる、好きなものなど興味関心から係わり合いを始めることで、やろうとするきっかけになったり、活動を意識することができたりする。子どもの気持ちの共有、活動の共有を図っていくことで、子どもとよい関係を築いていくことが大切である。

文献

- 松田直（1997）障害の重い子どもの教育とコミュニケーション—子どもの意思の表出と係わり手のあり方—国立特殊教育総合研究所，5-12.
- 土谷良巳（2006）重症心身障害児・者とのコミュニケーション．発達障害研究，28，4，238-247.

令和4年4月1日 受理

Interpretation of expression of children with limited expression and interaction with them

Yuka KAMEYAMA, Shinichi OKAZAWA